The background of the cover is a photograph of a cityscape. In the foreground, there is a calm body of water reflecting the sky and buildings. A white swan is visible in the bottom left corner of the water. The middle ground shows a row of trees with autumn-colored leaves. In the background, several modern buildings are visible, including a prominent blue glass skyscraper on the right. The sky is a clear, bright blue.

令和7年度 浦安市青少年海外派遣 事業報告書

浦安市

目次

1.姉妹都市交流とは？	1
2.浦安の姉妹都市～オーランド市～	1
3.浦安市青少年海外派遣事業とは？	1
4.オーランドってどんなところ？	2
5.実施計画	3～4
6.浦安市青少年海外派遣選考委員会の組織及び運営に関する要綱	5
7.選考委員名簿	6
8.派遣生名簿	7
9.派遣生の選考	8
10.研修等プログラム	9
11.本研修日程表・実績	10～17
12.派遣生報告	18～65
(1) 海外派遣全体を通して	
(2) ホストファミリーとの交流	
(3) 内容別報告	
13.英語による日本紹介 各グループの概要	66～68
14.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ	69

1. 姉妹都市交流とは？

姉妹都市のルーツは米国と言われています。第2次世界大戦終結後、本当の世界平和をもたらすには市民レベルでの交流が必要だと、米国のアイゼンハワー大統領によって提唱されました。さまざまな国の市民同士が友達になりお互いに理解しあい、協力しあうことが、ひいては国同士の相互理解と協力を結びついていくということが認識されてきたのです。

そしてこの運動の輪は世界中に広まり、日本でも令和7年9月時点で、907の自治体が姉妹都市を持つにいたっています。

姉妹都市交流を通じて、私たちは異なった文化を持つ人々とのふれあいをより身近に体験することができます。この地球上には何千、何万という異なった文化があり、今やそれらは私たちの生活とは決して無縁であるとは言い切れない時代になっています。姉妹都市との交流は、私たちが真の国際人となっていく過程の第一歩であるとも言えるのではないのでしょうか。

2. 浦安の姉妹都市 ～オーランド市～

昭和62年から「浦安市国際交流協会」により姉妹都市の選定が始まりました。様々な勉強会や議論を経て複数の候補からオーランド市を選定した後、平成元年10月23日にオーランド市で、続いて平成2年1月27日に浦安市で姉妹都市協定の調印式が行われました。平成元年は浦安が村として誕生してから100年目にあたる記念の年であり、提携は浦安誕生100周年を記念する1大イベントとして祝福を受けることになりました。

3. 浦安市青少年海外派遣事業とは？

浦安市とオーランド市との姉妹都市提携を機に、青少年での交流を促進することを目的として、平成2年度より浦安市青少年海外派遣事業が実施されています。浦安市青少年海外派遣事業では、市内在住青少年をオーランドへ派遣し、ホームステイや現地高校授業体験、市内施設見学、市庁舎訪問など、市民や青少年との交流を図っており、令和7年度までに26回、327名を派遣しました。

感受性豊かな時期に、外国の文化や習慣を実際に体験し、様々な交流を持つことで、国際的視野と豊かな国際感覚を身につけてほしいと考えています。

4.オーランドってどんなところ？

アメリカ合衆国 フロリダ州オーランド市

位置：西経 81 度、北緯 28 度
オーランド市との時差＝日本時間－14 時間（夏時間の場合は－13 時間）

気候：亜熱帯性気候

年平均気温：22℃

面積：295.3 km²

人口：307,573 人(2020 年時点)

市制施行日：1875 年 7 月 31 日

オーランドは元来、柑橘類などを中心とする農業で栄えた町でしたが、オーランド近郊にケネディ・スペース・センターやディズニー・ワールドができたことにより、急速に成長をはじめました。

市近郊には、ディズニー・ワールドのほか、ユニバーサル・オーランド・リゾート、シーワールドなど、いくつものテーマパークがあります。そのほかにも、100 を超えるゴルフ場やリゾートホテルが林立し、多数のショッピングモールもあります。

全米屈指の観光・保養都市として発展している一方、手つかずの自然環境も大切に、「シティー・ビューティフル（美しいまち）」を合言葉に、環境保全・自然保護にも取り組んでいる美しいまちです。

オーランド市の位置図



5.実施計画

(1) 目的

米国フロリダ州オーランド市との姉妹都市交流事業の一環として、本市在住の青少年をオーランド市に派遣し、ホームステイ、公共施設や教育機関の訪問等による異文化体験やオーランド市民との交流などを通して、本市の次代を担う若い世代の国際的な視野を広め、国際社会を担うにふさわしい人間の育成を図るとともに、姉妹都市交流を推進し、市民の多文化共生意識の醸成を図る。

(2) 主催

浦安市

(3) 派遣期間

令和8年3月1日(日)～3月10日(火) 8泊10日

(4) 派遣先

米国フロリダ州オーランド市

(5) 派遣内容

市役所訪問、現地高校での交流(授業参加、プレゼンテーション発表)、ホームステイ、公共施設や教育機関訪問等

(6) 派遣資格

下記の要件を全て満たす方。ただし、次の各号のいずれかに該当しなくなった場合は、派遣決定を取り消す場合がある。

- ① 生年月日が平成19(2007)年4月2日～平成22(2010)年4月1日までの方
- ② 市内に在住している方(住民基本台帳に記録されている方)
- ③ 派遣について保護者の同意が得られている方
- ④ 心身共に健康で、協調性に富み、派遣計画にしたがって規律ある行動及び団体生活ができる方
- ⑤ 事前研修、派遣の全行程、事後研修及び報告会に全て出席できる方
- ⑥ 有効期限が令和8年6月10日(水)以降であるパスポートを令和7年12月14日(日)までに用意できる方 ※出国審査が厳しくなる可能性があるため
- ⑦ 将来も本市の国際交流、地域活動、派遣の成果を積極的に活かせる方
- ⑧ 中学校卒業程度の英語基礎能力があり、簡単な会話ができる方
- ⑨ 米国フロリダ州オーランド市の高校生が浦安に来訪した際に、ホームステイの受け入れ(可能な限り受け入れてください)や、イベント等のボランティアに協力できる方
- ⑩ 市内における国際交流活動に積極的に協力できる方

(7) 派遣人数

10名 ※原則、男女共に2名以上を派遣。ただし応募状況によってはこの限りではない。

(8) 引率者

3名(市職員2名、専用添乗員1名)

(9) 参加費

1人 280,000円

〈参加費に含まれるもの〉

航空運賃、空港使用料、宿泊費、施設入場料、交通費、ツアーガイド料、公式行事中の食事代

〈参加費に含まれないもの〉

パスポート申請費用、ESTA申請費用

※ホストファミリーによっては、その他自己負担が生じる場合あり。

(10) 募集方法

- ・ 募集期間…令和7年7月1日（火）～7月31日（木）
- ・ 募集方法…募集案内を広報うらやす及び市ホームページに掲載し、募集チラシを市内高校及び公民館等の公共施設に配布。
- ・ 提出書類…申込書兼承諾書

(11) 選考方法

選考委員会が、申込書兼承諾書、日本語による面接、英語スピーキングにより審査を行い選考する。

(12) その他

災害の発生や国際情勢の変化があった場合、また、外務省の海外安全ホームページに掲載の危険レベルが2以上の場合は、派遣生の安全を最優先し、派遣を中止する可能性あり。

(13) スケジュール

年	月	日	曜日	実施事項
令和7年	7	1	火	募集案内を「広報うらやす7月1日号」及び「市HP」に掲載 市内高校にチラシを配布
		31	木	募集締め切り
	10	上旬		第1回選考委員会 市役所会議室 〔主な内容〕 事業概要説明・応募状況・選考基準調整
	11	1	土	第2回選考委員会（選考会含む） 9：00～14：00 選考会 9：00～12：30 市役所4階会議室S4・6 選考結果確認 13：30～14：00 市役所4階会議室S4
		16	日	事前説明会・第1回研修会 9:30～16:00 市役所10階 協働会議室 〔主な内容〕 AM 事前説明会（保護者も参加）：事業概要説明・必要書類提出 PM 第1回研修会：自己紹介・オーランドでの発表グループ分け
	12	13	土	第2回研修会 9:30～12:00 文化会館3階 中会議室 〔主な内容〕 オーランドでの発表ドラフト提出・リハーサル
令和8年	2	15	日	第3回研修会及びOB・OGとの交流会 9:00～12:00 市役所10階 協働会議室 〔主な内容〕 AM 結団式（市長表敬）・オーランドでの発表リハーサル・最終確認（パスポート・ESTA・保険・日程等） PM 平成30年度派遣生とOB・OGによる交流会
	3	1	日	オーランド派遣（8泊10日）
		10	火	
		29	日	第4回研修会 9:30～12:00 市役所10階協働会議室 〔主な内容〕 レポート提出確認・報告会の説明
4～5月				青少年海外派遣事業報告会 時間・場所未定 〔主な内容〕 予行練習・公開報告会

6.浦安市青少年海外派遣選考委員会の組織及び運営に関する要綱

（趣旨）

第1条 この要綱は、浦安市附属機関の設置等に関する条例（令和4年条例第2号）第2条第1項の規定により、青少年海外派遣生の候補者を審査することを目的として設置した浦安市青少年海外派遣選考委員会（以下「委員会」という）の組織及び運営に関する必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第2条 委員会は、7人以内の委員をもって組織する。

（委員）

第3条 委員会の委員は次に掲げる者を、市長が委嘱する。

- （1）市職員
- （2）学識経験者
- （3）国際交流団体代表

（委員の任期）

第4条 委員の任期は、委嘱の日から委嘱の日の属する年度の青少年海外派遣生の派遣期間の終了日までとする。

（委員長及び副委員長）

第5条 委員長は、浦安市市民経済部長をもって充てる。

2 委員長は、会務を総理し委員会を代表する。

3 副委員長は、学識経験者をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。

5 委員長及び副委員長に事故があるとき、又は委員長及び副委員長が共に欠けたときはあらかじめ委員長が指定した委員がその職務を代理する。

（会議）

第6条 委員長は委員会の会議を招集しその議長となる。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

（報告）

第7条 委員会は、選考審査した海外派遣生の候補者を、すみやかに、市長へ報告するものとする。

（庶務）

第8条 委員会の庶務は市民経済部地域振興課において処理する。

（補助）

第9条 この要綱に定めるもののほか委員会の運営に関し、必要な事項は市長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成8年4月1日より実施する。

7.選考委員名簿

1	委員長	浦安市市民経済部長 高柳 幸志	市職員
2	副委員長	学校法人明海大学 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 木内 伸樹	学識経験者
3	委員	浦安市国際交流協会 会長 小西 英雄	国際交流団体代表
4	委員	浦安市国際交流協会 総務部会部員 土井 隆司	国際交流団体代表
5	委員	浦安市国際センター 所長 知花 大輔	学識経験者
6	委員	浦安市教育総務部次長 村上 陽子	市職員
7	委員	浦安市市民経済部次長 齋藤 章典	市職員

8.派遣生名簿

No.	氏名	学年等
1	まつだ かな 松田 佳奈	県立高校3年
2	あめだに はやた 飴谷 颯大	県立高校3年
3	おおた ゆず 太田 結珠	県立高校1年
4	たかはし かずひろ 高橋 和洋	私立高校1年
5	ランジャン イシャン	私立高校1年
6	ひらかわ なお 平川 菜央	私立高校2年
7	やまもと ゆきの 山本 雪乃	私立高校1年
8	ひぐち りほ 樋口 理帆	私立高校3年
9	しずや たすく 静谷 匡	私立高校2年
10	はら あやか 原 彩華	私立高校1年

〔随行者〕

随行者 地域振興課 主事 アスラニ 那月
 随行者 地域振興課 主事 新井 陸
 専用添乗員 杉山 里絵

9.派遣生の選考

(1) 選考委員会

第1回選考委員会

日時：令和7年10月3日（金）14：30～

場所：浦安市役所 4階 S5 会議室

- 内容：①青少年海外派遣選考委員会について
②青少年海外派遣事業実施計画・募集等について
③派遣生の応募状況について
④選考方法について
⑤面接質問項目等について

第2回選考委員会

日時：令和7年11月1日（土）9：00～

場所：浦安市役所 4階 S2～S5 会議室

内容：〈選考会〉

- ①受付
②選考（日本語による面接、英語のスピーキング試験）

〈選考会議〉

- ①選考会実施結果報告
②選考審査
③承認

(2) 選考結果

公募期間：令和7年7月1日（火）～7月31日（木）

応募者：16名

選考会参加者：12名

派遣決定者：10名

10.研修等プログラム

会名	日時	場所	内容
事前説明会	令和7年11月16日（日） 9：00～9：55	市役所10階 協働会議室	①主催者挨拶 ②姉妹都市の交流について ③海外派遣の概要について ④事務説明 ⑥質疑応答
第1回研修会	令和7年11月16日（日） 10：00～11：35	市役所10階 協働会議室	①アイスブレイク ②浦安市・オーランド市についての学習 ③グループワーク ④その他連絡事項
第2回研修会	令和7年12月13日（土） 9：30～12：00	文化会館 中会議室	①課長挨拶 ②レポートについて ③プレゼン発表（明海大学教授からの指導） ④その他連絡事項
第3回研修会 結団式	令和8年2月15日（日） 9：00～12：00	市役所10階 協働会議室	①出国にあたっての注意事項等説明 ②結団式（市長表敬） ③プレゼン発表リハーサル
本研修	令和8年3月1日（日） ～3月10日（火）	オーランド市	
第4回研修会	令和8年3月29日（日） 9：30～10：50	市役所10階 協働会議室	①市民まつり展示内容の作成 ②その他連絡事項
市長報告	令和8年4月26日（日） 9：30～10：00	市役所10階 協働会議室	①派遣生からの報告 ②市長挨拶 ③歓談 ④記念写真

11.本研修日程表・実績

日 程	主な内容
3月1日(日)	出発→オーランド国際空港着 空港にてホストファミリーと合流し、各家庭へ 
3月2日(月)	<ul style="list-style-type: none"> • Dr.Phillips 高校授業参加 • Orlando City Hall 訪問 • University of Central Florida 訪問 • Boys & Girls Club of Central Florida 訪問
3月3日(火)	<ul style="list-style-type: none"> • Dr.Phillips 高校授業参加 • Orlando Wetland 訪問 • Dr.Phillips 高校で URAYASU DAY 開催
3月4日(水)	<ul style="list-style-type: none"> • Dr.Phillips 高校授業参加 • Lake Eola 見学 • KIA Center 訪問 • Beardall Senior Center 訪問 • Orlando Fire Department 訪問 • Orange County History Center 訪問
3月5日(木)	<ul style="list-style-type: none"> • Dr.Phillips 高校授業参加 • Disney's Animal Kingdom 訪問 • Dr.Phillips 高校 Spring Festival 参加
3月6日(金)	<ul style="list-style-type: none"> • Dr.Phillips 高校授業参加 • Kennedy Space Center 訪問
3月7日(土)	終日ホストファミリーと交流
3月8日(日)	終日ホストファミリーと交流
3月9日(月)	オーランド空港発の飛行機に乗り日本へ 
3月10日(火)	浦安市役所到着、解散

令和8年3月1日（日）

出発→17：00頃にオーランド国際空港着
空港にてホストファミリーと合流し、そのまま各家庭へ



3月2日 (月)

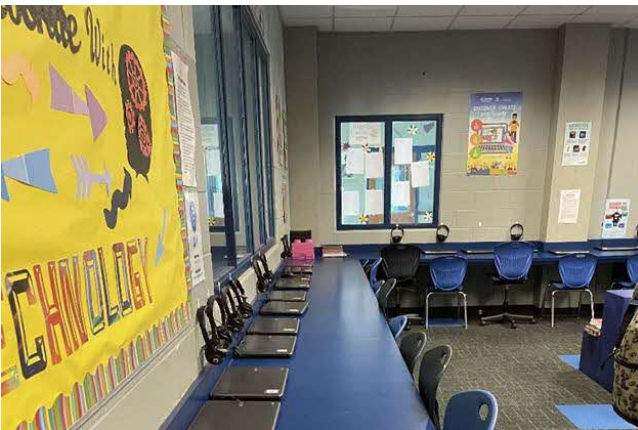
Orlando City Hall 訪問



University of Central Florida 訪問



Boys & Girls Club of Central Florida 訪問



3月3日(火)

Orland Wetland 訪問



URAYASU DAY 開催

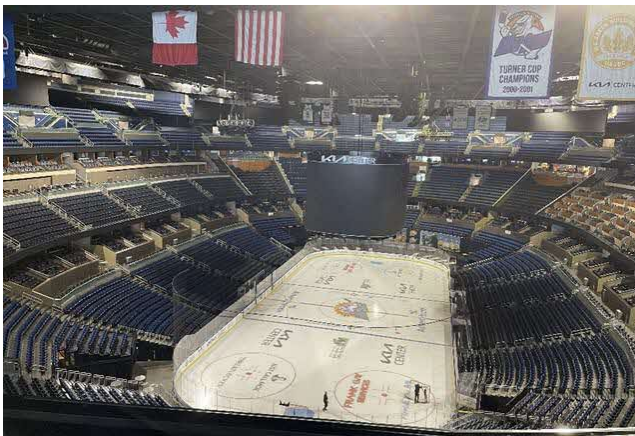


3月4日 (水)

Lake Eola 見学



KIA Center 訪問



Beardall Senior Center 訪問



Fire Department 訪問



Orange County History Center 訪問



3月5日 (木)

Disney's Animal Kingdom 訪問



Dr. Phillips 高校 Spring Festival 参加



3月6日 (金)

Kennedy Space Center 訪問



3月7日(土)・8日(日)

ホストファミリーと交流(終日)



3月9日(月)

3:40 オールランド空港発の飛行機に乗り日本へ

3月10日(火)

18:00 浦安市役所到着、解散



12.派遣生報告

(1) 海外派遣全体を通して

松田 佳奈

本海外派遣を通して、異なる文化や価値観に触れることの重要性を実感した。特に印象的であったのは、フロリダ州オーランドの自然環境の豊かさである。広大な空や豊かな緑に囲まれた環境の中での生活は、日本での日常とは大きく異なり、時間の流れや人々の心の余裕にも違いをもたらしていると感じた。このような環境の違いは、人々の考え方や価値観の形成にも影響を与えているのではないかと考えるようになった。

また、オーランドは多様な人種や文化が共存する地域であり、その点も非常に印象に残っている。異なる背景を持つ人々が共に生活しているにもかかわらず、互いを尊重し合いながら自然に関わっている様子が見られた。そのような環境の中で、日本から来た私たちを特別視することなく、当たり前のように温かく受け入れてくれたことに大きな驚きを覚えた。同時に、自分自身がこれまで無意識のうちに持っていた「外国人」という枠組みで人を見る視点に気づかされる機会にもなった。

これらの経験から、多様性を受け入れ、異なる価値観を持つ人々と対等に関わる姿勢の重要性を学んだ。今後はこの経験を活かし、異文化に対して柔軟かつ積極的に向き合いながら、相手の立場や背景を理解し尊重できる人間でありたいと思う。

私が見たのはアメリカのほんの一部に過ぎないと思うが、温かく迎えてくれた現地の人たちの気持ちからは、国や人種の違いを超えたものを感じられた。今回の派遣で見たもの感じたこと、素敵なお縁に感謝して、私も誰かにその温かさを繋いでいきたい。

飴谷 颯大

私は今回の海外派遣を通して、異文化同士の接触と交流の大切さを改めて学んだ。

普段日本、浦安で生活している中で、観光客などで外国の方を見かけることはあっても、実際に会話をして交流する機会はほとんどない。そのような状況下で暮らしていると、この日本での普段の生活の中に、日本特有の文化が数多く含まれていることになかなか気づくことはない。また、地域差はあっても基本的に日本国内で文化の違いなどはほとんどない。そのため、今回の海外派遣で感じた文化や環境の違いは、私にとって全てが新鮮なものであった。

まず、言語の壁がある。ほとんどの人が同じ日本語という言語で会話をする環境で過ごし、かつ学問としてしか他言語に触れてこなかった自分としては、今まで学んできた英語を駆使して会話をするのは、やはりとても新鮮な体験であった。

また、日本での当たり前が海外では当たり前ではないということに、様々な場面で気づくことができた。特に食事において一番驚いたことは、食事を食べきれなくても許されるという点だ。日本だと、給食の時間にも残さず食べる、苦手なものでも一口は食べるという教育をされて育った人は多いだろう。しかし、ホストファミリーと夜ご飯を食べたとき、ホストファミリーの人は食べきれない分を残していた。私も頑張って食べようとしたが、ホストファミリーに無理しなくていいよと言われ残した。今まで日本の感覚で育ってきた私としてはとても驚く出来事だった。

このように文化の違いを体感し、改めて日本の良さを認識し、そして新たに出会ったアメリカの文化の良さに気づかされた。日本の周囲を考慮して行動する文化、アメリカの自分の気持ちに正直になる文化、どちらの良さも感じられる10日間であった。そして、文化にはどちらが良い悪いということはないということにも気づかされた。ある文化が一個人に合うか合わないかはあるにしろ、それが文化の善悪ではないということを改めて意識しなければならないと考えた。

太田 結珠

海外派遣を通して、私は多くの学びと気づきを得ることができた。出発前は、自分の英語がどれだけ通じるのか不安で、現地でうまく生活できるのか心配な気持ちが大きかった。しかし、実際にアメリカで過ごしてみると、完璧な英語でなくても、相手に伝えようとする姿勢があればコミュニケーションは成り立つということを実感した。ホストファミリーや現地の人々は、私の拙い英語でも理解しようとし、ジェスチャーや分かりやすい言葉で伝えてくれた。その経験から、正しい英語を話そうとすることよりも、伝えようとする気持ちが大切だということが分かった。

また、学童施設の見学やドクターフィリップス高校、大学に通っている人たちとの交流を通して、日本との文化や環境の違いを実際を感じることもできた。アメリカの学童は設備が充実しており、子どもたちが自分のやりたいことを自由に選択できる環境が整っていた。規模が大きいため、ほとんどの施設に、日本には無いものが導入されていた。このような経験を通して、日本の良さや海外の良さの両方を知ることができ、広い視野で物事を考えることの大切さを学んだ。

さらに、プレゼンテーションや日常の会話の中で、現地の人々の積極性にも刺激を受けた。自分の意見をしっかりと伝えたり、疑問に思ったことをすぐに質問したりする姿勢は、今の自分に足りない部分であり、今後見習っていきたいと感じた。

今回の海外派遣は、単に英語力を高めるだけでなく、自分自身の考え方や行動を見つめ直す大きなきっかけとなった。これからは、この経験を活かして、失敗を恐れずに新しいことに挑戦し続けたいと思う。

高橋 和洋

国際交流において、私たちは何を「交流」しているのだろうか。私は、マレーシアのインターナショナルスクールに4年間留学した経験から、相手の文化を知ることが国際交流だと考えてきた。しかし今回の派遣事業を通して、その問いへの答えは変わった。国際交流とは、相手を知ると同時に、自分自身や浦安、日本を見つめ直すことでもあるのだと気づいたのである。

今回の派遣では、Dr. Phillips 高校での授業参加や市庁舎、UCF、消防署、高齢者施設の訪問、ホームステイを通して、多様な背景を持つ人々と関わる機会があった。街全体に、人種や宗教、言語の違いを受け入れる姿勢が根づいていることを肌で感じた。その中でも特に印象に残ったのは、Dr. Phillips 高校で学習支援について話を伺ったことである。同校では「Child Find」という仕組みのもと、学習のつまずきを早期に専門チームへ報告し、必要な支援につなげる体制が整えられていた。担当者は支援の意義を「leveling the playing field (競争条件をそろえること)」と説明していた。配慮とは特別扱いではなく、誰もが同じスタートラインに立つための手段だという考え方である。私自身もディスレクシアという学び方の違いを抱えてきたため、この言葉は実感を伴うものとして深く心に残った。

一方で、現地で日本や浦安について紹介しようとするたびに、自分がまだ多くのことを知らないと感じかされた。多様性の中で人と関わるには、相手を理解するだけでなく、自分のことを自分の言葉で伝える力も必要であり、言語はそのためのツールなのだと思う。

今回の経験を通して、自分を知り、相手を知ることの大切さを改めて実感した。そしてその気づきがあったからこそ、「leveling the playing field」という考え方の意味もより深く受け止めることができた。日本では、こうした考え方がまだ十分に共有されていない場面もあると感じている。今後はこの経験を生かし、日本や浦安についてさらに学ぶとともに、学び方の多様性を含めた国際交流のあり方を、自分なりに考えていきたい。



ランジャン イشان

今回の派遣事業を通して、私は多くのことを感じ学んだ。中でも私が出会ったアメリカの人々は、日本人とは別の良さを持った人柄で毎日接してくれ、それがアメリカの良さのひとつだと感じる事ができた。日本人とアメリカの人々の最も大きな違いはやはり、相手との距離感や立ち位置だ。距離感と言っても物理的なものではなく、心理的なものだ。アメリカの人々は、人の話や相談を聞く時、それが「店員と客」「友人同士」という立場であっても、一人の「家族」として話を聞いてくれる。そこには彼らの温かさ、相手を尊重し大切にしたい気持ちが込められているのではないかと私は気付かされた。私が日本で生活している時、店員や友人に話をしたとしても、家族としての立場で話を聞いてくれることはないだろう。それは、日本では自分と相手の立場を「店員と客」「友と友」のように明確にし、その立場に沿って相手に礼を尽くすからだ。アメリカや他の国とは違う思いやりの気持ちを持つ日本が「おもてなし」という言葉で評価される理由にも気付けたと思う。立場を明確にし、礼を尽くす日本、より身近な立ち位置になり親身になるアメリカ。それぞれの違いや良さに気付けたからこそ、どちらの考えも尊重して、人として成長していきたいと思った。

そして、この事業を経て、私は自分が大切にすべき、軸となる考え方を見つけた。それはどのような素晴らしい結果も「挑戦から始まる」ということだ。この事業の中で私は、NASAのケネディスペースセンターに行った。そこには宇宙開発に関する多くの歴史的資料があった。何度も宇宙に行ったスペースシャトルの一部であるオービタや月の石、歴代宇宙飛行士の功績を残す記念の部屋など、様々な偉業を讃えるものがあった。「挑戦を繰り返した結果の成功、必要なのは試行錯誤を繰り返すこと」というガイドの方の言葉がとても印象に残っている。

ここから私は「必要なのは挑戦することと、試行錯誤を繰り返した結果の成功だ」



ということを学んだ。そしてケネディスペースセンターには偉業が讃えられるだけでなく、起こってしまったとても悲しい事故を追悼する部屋もあった。アポロ1号やチャレンジャー号についても、計画に対する尽力への感謝、そして追悼の文章がしっかりと記されていた。成功体験から学ぶことも大事だが、起こってしまった悲しい事故や失敗したことにも目を向け、次に繋げる姿勢の大切さを身に染みて感じる事ができた。

最後に、改めてこのような学びの機会をくださった浦安市の皆様、並びにオーランド市の皆様、そして両親に感謝をしっかりと伝えたい。このような貴重な経験の機会をいただき、ありがとうございました。

平川 菜央

今回の海外派遣を通して、何事も積極的に取り組むことの大切さを学んだ。私は自分の英語力に自信がなく、うまく聞き取れなかったらどうしよう、相手に分かりやすく伝えるなんてできるのかと不安で仕方がなかった。しかし、ホストファミリーをはじめオランダで関わった人達はみな優しく、私の拙い英語での会話に真摯に向き合ってくれた。そのため最初はすれ違いや失敗を恐れて話しかけるのを避けていたが、段々と自分から質問をするようになっていった。会話をする中で、今まで気づけなかったアメリカと日本との日常生活の違いなどが分かり、とても貴重な経験になった。どうしても困った時には翻訳アプリを使うなどして、とにかく話しかけてみることで自分の成長につながると感じた。

また、学校で英文法を学んだだけではコミュニケーションはとれないことが分かった。テストで使うための英語だけでなく、将来仕事や生活の中で色々な背景の人と交流をするための英語を積極的に学んでいきたい。

そして、ドクターフィリップス高校の生徒と関わって、自分の興味や関心に誠実であることの重要性も学んだ。私のホストシスターは絵や刺繍などのデザインや音楽、化学など分野を超えたさまざまなことに関心があった。ダンボールで作られた未来の建築物の作品や好きなアニメのキャラの衣装、また楽器の練習の様子を見せてもらい、勉強と両立して好きなことを突きつめている姿がかっこよく感じた。彼女の友達も兼部をしたり、課外活動に取り組んだりしていた。暇な時間が出来たらスマホを触ってしまう私とは異なり、時間を有意義に使っているように感じた。

最後に、この10日間の研修はとても充実しており、自分自身について考えるいいきっかけになった。この経験を活かして、意見を持って積極的に行動できるように成長したい。10日間本当にありがとうございました。

山本 雪乃

私は今回の 8 泊 10 日の海外派遣を通してたくさんのことを学び、自分自身の大きな成長に繋がったと思う。

まず、どんな時にも自分の意思を持ってそれをしっかり伝えることの重要さだ。私自身今回の研修が初めての海外だった。そのため日常の会話についていけるのか不安で最初は聞き取ることに精一杯になっていた。自分の言いたいことが英語で上手く言うことができなったり、どれがいい？と聞いてくれた時にすぐに選ぶことができなくて少し困らせてしまったりもした。そんな時もホストシスターは優しく私が答えるまで待っていてくれたけれど、申し訳ないなと思うことが何度かあった。ホストマザーとシスター同士の会話をみても、お互いに何の迷いもなく自分の意見を答えていた。私もこんな風にスムーズに話せるようになりたいと強く思った。

次にアメリカの高校生はとてもフレンドリーであることだ。高校で毎日教室に向かう際に Jade(ホストシスター)の友達に会うと私にも話しかけてくれた。同じ授業のクラスメイトからもたくさん声をかけてもらった。国境を超えてもこんなにたくさんの人から嬉しそうに話しかけてくれることが本当に嬉しかった。自己紹介はもちろん、「これって日本語でなんていうの」や「フロリダでの生活はどう？」などと質問してくれることが多かった。さらに、Spring Festival(高校の国際的なイベント)で日本のブースに協力した時にも、たくさんの方が来てくれて一緒に折り紙しながら話すことができた。このようにみんな日本に興味を持ってくれていたことが嬉しいなと感じた。

今回の派遣事業がこんなにも充実した素敵な旅になったのは 10 人の派遣メンバーやホストファミリーがいたからだ。10 日間と言う短い期間だったけれども 1 日 1 日がとても充実した日々だった。私にとって一生の宝物である。素敵な出会いができたことに感謝し、これからもっと海外のことに興味を持って派遣事業で学んだことを一つ残らず生かしていこうと思う。



樋口 理帆

海外派遣を通して、SNSで簡単に人とつながることができる現代においても、対面で会話をすることの大切さを強く実感した。派遣前からホストファミリーとはSNSで連絡を取り合っており、ある程度の人柄は理解しているつもりだった。しかし、実際に現地で顔を合わせ、同じ時間を共有する中で、画面越しでは伝わらなかった相手の表情や声のトーン、空気感から、その人の温かさや人となりがより深く感じられた。長時間の移動を経なければ行くことができないほど遠く離れた場所であっても、心から温かく迎え入れてくれる人がいることを経験し、人と人とのつながりの尊さや人間の温かさを改めて実感した。

また、私は一昨年にドクターフィリップス高校の生徒をホストファミリーとして受け入れた経験がある。その生徒とは帰国後もSNSで連絡を取り続けて関係を維持してきた。そして今回、今度は自分が相手のもとを訪れ、アメリカで再会することができた。この再会は単なる一時的な交流ではなく、継続的なつながりの中で実現したものであり、SNSの利点を実感するとともに、実際に会うことで関係がさらに深まることも感じた。

このような経験から、SNSは人と人をつなぎ続ける有効な手段である一方で、その関係をより豊かなものにするためには対面での交流が不可欠であると考えられる。今後はこの海外派遣で出会った仲間たちとSNSで連絡を取り続けながら、再び会いに行ったり、日本に来た際には積極的に関わったりするなど、対面での再会を大切にしていきたい。さらに、日常生活においてもオンラインのやり取りだけで満足するのではなく、直接会って相手と向き合う時間を意識的に増やしていきたいと考えている。このように、オンラインと対面の両方を組み合わせることで、より深く豊かな人間関係や国際的なつながりを築くことができる。これこそが、姉妹都市交流を通して得られる本当の意義であると感じた。

静谷 匡

今回の派遣を通して、日本とアメリカでの学びへの好奇心の違いを感じた。保育園や幼稚園、小学校、中学校から今に至るまで、学業は学校が提供をし、自分は授業に対してその学習の意欲に関わらず、受けなければならず、やりたいことや気になる学びに対しては、学校とは別で習いに行くか、一人でやらなければいけない環境にあった。しかし、アメリカの学習環境は日本とは随分異なっていて、幼稚園や小学生のうちから、自分のやりたいことを学び、作り、中には企業とも連携をして事業に関わっていくことがあることを知った。子ども達が学習に対して自分の好きなこと、好奇心に合わせて、進めていくという積極性は今の日本での勉強の中であまり感じられていなかった部分だったため、自分の好きを追求できる環境が整っていることの重要性が感じられた。

また、自由であるが故の自律の大切さに気付かされた。日本の学校や授業では必ず、校則であったり、授業にのぞむ態度であったり、たくさんのルールがある中で過ごしているの、日々を送る中で体や心に無意識にすることはいけないこととしていいことの境目ができる。けれど、アメリカの場合、授業の風景を見てみると、自分のとっている授業でなければ、パソコンをいじっていても、ご飯を食べても、寝ても怒られることはなかった。周りの人が注意をしないため、自分で自分の行いに対して意識を持って行動することが求められる。そのため、普段から、自分で物事を決めて取り組むという自己が確立されていかなければいけない。だからこそ、常に自分の意見や考えを持ってアメリカの人たちは生活を送り、その意見や考えを積極的に発信する力があるのだと思った。

今後、派遣で得た気づきや学びをこれからの過ごし方や考え方に活かしていきたい。

原 彩華

今回の8泊10日の海外派遣を通して感じたことは、言語の伝わらない辛さ、人の温かさ、新しいことに挑戦する勇気の大切さである。学校の定期テストなどの筆記テストでは、相手が話している言葉が文字として書いてあるが、実際の会話ではそのようなことはなく、また、普段は聞くことがなかなかないネイティブの英語に囲まれる環境であった。単語は分かるが、何を伝えたいのか分からない、自分が伝えたいことも発音や文法がしっかりしていないため、なかなかホストファミリーに伝わらなかった。そのため、ホストファミリーに会った初日は「なんで私はここに来ちゃったんだろう」と考え込んでしまい、自分の唯一自信のある英語を嫌いになりかけて、自分の取り柄が無くなってしまふことがとても怖くなった。

しかし、ホストファミリーが、私が理解できるようにゆっくり話してくれたり、わかりやすい単語で話しかけてくれたおかげで、2日目からは耳が慣れてきたのか、なんとなく言いたいこと、質問してきてくれることがわかってきて、コミュニケーションをとる楽しさがわかってきた。

ホストファミリーは、家族のことについて、アメリカの文化について、現地の学校についてなど、沢山のことを教えてくれて、この派遣に参加しなければ知らなかったことも沢山知れてとても興味深かった。

Dr. Philips high school に行った際も、「日本から来てくれた子だよね？」と優しく話しかけてくれる子がおり、その子とは今でもDMで話したりして、交流が続いている。また、ホストファミリーだけではなく、その周りの人みんなが歓迎してくれたことで友達の輪が広がり、その中で、日本に興味がある友達に、日本の文化について話すことができた。

海外交流を通して日本について伝えられたことがとても誇らしかった。

松田 佳奈

本海外派遣において、ホストファミリーとの交流は非常に大きな学びと気づきを与えてくれるものであった。私を受け入れてくれた家庭は、フランス人の母とオーストラリア人の父を持つ生徒がいる家庭であり、彼女自身が複数の文化的背景を持ちながら生活している点が強く印象に残っている。彼女は日常的に多様な文化に触れながら育っており、そのような環境の中で培われた柔軟な価値観や他者への理解の深さを感じた。同時に、その姿は海外での生活経験を持つ自分自身とも重なる部分があり、親近感を覚えるとともに、多様性が当たり前である環境の重要性について改めて考えさせられた。

また、ホストファミリーは日本文化に対して高い関心を持っており、その点にも驚かされた。例えば、スタジオジブリの映画について詳しく話してくれたり、日本の食べ物について興味を示し、実際に様々なものに挑戦しようとする姿勢が見られた。自国とは異なる文化に対してこれほどまでに積極的に関わろうとする姿勢は非常に印象的であり、同時に、自分自身も他国の文化に対して同じような好奇心と行動力を持つ必要があると感じた。このような双方向の文化交流こそが、真の意味での国際理解につながるものであると感じた。

さらに、生活環境の違いとして特に印象に残ったのは、移動手段における車の重要性である。フロリダでは日常生活のほとんどにおいて自動車が必要不可欠であり、どこへ行くにも車での移動が前提となっていた。この点は公共交通機関が発達している日本とは大きく異なる点である。また、現地では16歳から自動車免許を取得できるという制度にも驚かされた。若い段階から自立した移動手段を持つことは、生活の自由度を高める一方で、責任も伴うものであり、文化や社会制度の違いを実感する機会となった。

このように、ホストファミリーとの生活を通して、文化的背景の違いや価値観の多様性、さらには生活様式の相違について深く学ぶことができた。そして何より、私を温かく迎え入れ、日々の生活を支えてくれただけでなく、オーランドの様々な場所へ快く案内してくれたホストファミリーには、感謝してもしきれない。彼らとの交流は単なる滞在体験にとどまらず、人と人とのつながりの大切さを実感する貴重な経験となった。この経験を今後の人生においても大切にし、異なる文化を持つ人々との関係を積極的に築いていきたいと考える。



飴谷 颯大

ホストファミリーの Amador Family は、お父さんの Mr. Amador とお母さんの Ms. Avery と長男の Atticus、長女の Attina、そして祖母の Ms. Ruiz の 5 人で暮らしている。お父さんの Mr. Amador は Dr. Phillips 高校の教師、お母さんの Ms. Avery はユニバーサルスタジオのエグゼクティブとして働いている。おばあちゃんは父方でニカラグアの出身であるため、お父さんとおばあちゃんは基本的にスペイン語で会話をしている。

ホストファミリーと対面する前、私はとても緊張していた。初めてのホームステイや自分の英語は大丈夫かなど様々な思いがあった。しかし、対面するとホストファミリーはフレンドリーに迎え入れてくれて、私の趣味などについて話してくれたため、私も身構えずに交流することができた。

日本文化を感じさせるお土産として扇子や緑茶、お煎餅などをホストファミリーに贈った。どのような日本文化が海外で知られているのかわからなかったが、一番喜ばれ、知っていると言われたものは「折り紙」だった。折り紙で鶴と箱と風船を作ったが、特に風船は鶴のように見た目が美しいだけでなく、息を吹き込んで膨らませて作るという、ユーモアにも溢れているため、とても喜んでもらった。海外で知られている日本文化について理解できたと同時に、定説や先入観に頼るのではなく、実体験に基づく一次情報を大切にすることを改めて学んだ。

一つ年下の Atticus は落ち着いた雰囲気、真面目さを感じながらもユーモアのある人柄で楽しく過ごせた。また、妹の Attina も落ち着いていながら、明るく話してくれたので自分も楽しく会話できた。お父さんの Mr. Amador はとても優しく、分からないことをたくさん教えていただいた。お母さんの Ms. Avery はとても明るい人柄で、面白い出来事がたくさんあったので、自分もたくさん笑って楽しんだ。

休日に訪れたユニバーサルスタジオでは、激しいジェットコースターにあまり乗ったことがなかった私が、アベンジャーズのとても速いジェットコースターに挑戦した。Attina は少し躊躇った感じだったが、Ms. Avery は挑戦しよう！と言って実際に乗った。とても楽しめて、Attina も楽しかったと言って楽しい 1 日を過ごした。

夜ご飯の際には、様々な料理を Ms. Avery に作っていただいた。中米の料理やイギリスの料理、アメリカの料理など世界各地のさまざまな料理をいただいた。特に日本と比べてとても大きくて、皮がパリパリで香ばしいグリルチキンがとても美味しかった。

日本では遠慮するような文化があるからか、自分の意思をはっきり伝えるのは失礼な気がしていた。ホストファミリーに夜ご飯で卵が要るかどうかと尋ねられた際、曖昧な返答になってしまったことがあり、ホストファミリーもどちらなのか、気を使わせてしまうような時があった。それゆえ、自分の意思を”Yes”か”No”ではっきりと伝えるように努力をした。すると、コミュニケーションが円滑に進むことが増えたと感じた。

彼らの優しい人柄に、8日間の短い間だったがたくさん助けられ、自分の人生の中でも本当に心に残る出来事になった。これからもホストファミリーと交流を続けていくとともに、異文化交流をさらに活発に行っていきたいとも強く感じた。



太田 結珠

最初にホストファミリーであるビクトリアから連絡が来た時はとても嬉しかった。初めて英語で連絡を取り合ってお互いのことがわかるようになってきて実際に会うのがとても楽しみになった。だが、アメリカに行く日が近づくと私は怖くなった。連絡している時は分からない単語などはすぐ調べられたし、文章もゆっくり考える時間があった。だが、実際に会って話すとなると自分の言いたいことをゆっくり考える時間はないし、言っていることが分からなかったら分からないまま終わってしまうと思ったからだ。しかし、行ってみたら、思ったほどではなかった。ビクトリアは私が理解できていなかった時はジェスチャーや日本語を入れて話してくれたり、私に話す時はゆっくり話してくれたりと諦めず私に伝えようとしてくれた。それはビクトリアのお母さんやお父さんも同じで意味を知らない単語でもジェスチャーや表情から理解できて、とてもありがたいと感じた。晩御飯を家族で食べる時に、いつもたくさんみんな話していて笑いが絶えない暖かい家庭なのだろうと感じた。とても日本に興味を持ってくれていて私が「いただきます」と言うと真似して一緒に言ってくれた。途中から食べ終わった後はなんて言うの?と聞いてくれて「ごちそうさま」も一緒に言ってくれるようになったのでとても嬉しかった。

最終日に家族で植物園に行き、会話が途切れないようにビクトリアが植物や生物の説明をしてくれた。また、食事を注文する時も私が分からないときは1個ずつ説明してくれた。行動や言動の全てに気遣いや配慮などを感じてずっと感謝でいっぱいだった。

寝る前必ずハグをしてくれて、日本でハグをする機会がないので初めは戸惑いもあったが、だんだん慣れて異文化を実際に肌で感じる事ができた。私が泣いてしまった時にも抱きしめて慰めてくれた。言葉が完璧に伝わらない中でも優しさがめいっぱい伝わって、すごく安心する事ができた。

最初は発音が変わったらどうしようとか、間違えていたらどうしようなど色々考えてあまり声をかけることが難しかったが、ビクトリアが根気強く私に伝えようとしてくれたことで私も理解できるように頑張ろうと思えたし間違っても英語で話してみようという気持ちになった。

今回の経験からコミュニケーションをとるのは特別なことではなく日常のちょっとしたことを言葉にして伝えることでそのやり取りが積み重なり、特別な

ものになると思った。なので、これからは相手と関わることを恐れず、自分から1歩踏み出してみることを大事にしていきたいと思う。またビクトリア家のみなさんと会えたらいいなと思う。

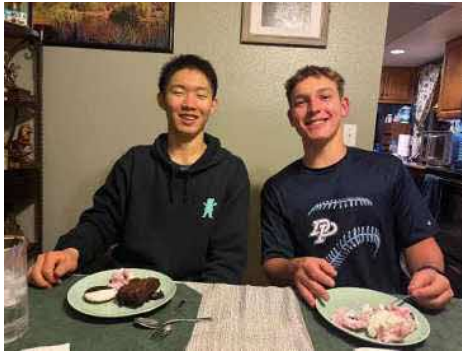


高橋 和洋

私がお世話になったのは、お父さんのジェイ、お母さんのキム、大学生のケイトリン、ホストブラザーのライアン、そして犬のチャンプという4人と1匹のファミリーである。両親ともにディズニーに勤めており、明るくエネルギッシュな家族だった。

到着した日、江戸切子のグラスをプレゼントすると、その美しさに家族全員が驚いてくれた。ライアンには、日本の食べ物で焼きそばが好きと聞いていたので焼きそば UFO を、野球好きにちなんで大谷翔平選手がパッケージに描かれている緑茶を持っていったところ、とても喜んでくれた。ゲストルームに通されるとさらに感動した。事前に「スター・ウォーズが好き」と伝えていたところ、部屋の中がスター・ウォーズのグッズで飾られていたからだ。ライアンからは DPHS Panthers 野球チームの T シャツをもらい、温かい歓迎に緊張が一気にほぐれた。

その夜は、キム手作りのチョコチャンククッキーと濃厚なブラウニーをごちそうになり、食後はジェイとのギターセッションへと発展した。ジェイがヴァン・ヘイレンの「Eruption」を弾いてくれたときは、その迫力に圧倒された。音楽を通して言葉を越えた交流ができ、初日から忘れられない夜となった。



ホストブラザーのライアンとはすぐに打ち解けた。毎朝車で学校へ送ってくれ、通学中には野生の鹿を見かけたり、近所のワニや釣りの話で盛り上がったりと、会話が尽きなかった。カントリーミュージックではジョニー・キャッシュの話で意気投合し、ライアンがその博物館を訪れたことがあると聞いて驚いた。

ホストファミリーの日常の中心には、ライアンの野球があった。ライアンはピッチャーとしても、バッターとしてもチームの中心で、その活躍ぶりに何度

も驚かされた。私はもらった Panthers の T シャツを着て球拾いを手伝い、チームの一員になったような気持ちで応援した。金曜日の試合では、ライオンのチームが私の目の前で初勝利を収め、思わず歓声を上げた。試合後は家族みんなでチキンフィレを囲み、食卓はさらに賑やかになった。



木曜日の夜には、大学から帰省したケイトリンとその彼氏も加わり、みんなでテキサス風ブリスケットの BBQ ディナーを囲んだ。翌日、キムに感想を聞かれて「Delicious!」と答えると、キムは日本語で「おいしい」と一生懸命言おうとしてくれた。食卓を囲む喜びはどの国も一緒なのだと感じた。



帰国の日には、ジェイ、キム、ケイトリン、ケイトリンの彼氏、ライオン、そしてチャンプと一緒に見送ってくれた。「期間が短すぎるから、今度は家族でオーランドに来なさい」というキムの言葉が胸に響いた。ホストファミリーと過ごした8日間は、私にとってかけがえのない宝物である。そして、日常を共に過ごすことが、相手を知り、心を通わせる本当の国際交流につながるのだと学んだ。



ランジャン イشان

今回の派遣事業で、私は初めてホームステイを経験した。初めてのアメリカ、初めてのホームステイ。不安も少しあったが、「案ずるより産むが易し」という言葉を信じ、積極的に挑戦してみた。結果的にそれは、私にとって大きな成長の糧になったと思う。ホストファミリーから初めてメールが届き、彼らがイスラム教徒であることを知った時、私は世界の広さを感じた。「アメリカの人はキリスト教である」という未熟な私の固定観念を超えてきたからだ。それからは仲良くなるために共通の趣味を探し、現地で一緒にやりたいことなどをたくさん話した。実際に会った時には初対面のはずなのに、気まずさもなく和気あいあいと歓談することができた。お土産を渡した時のホストファミリーの表情はとても晴れやかで、一生懸命選んで良かったと思えた。

ホームステイの醍醐味と言っているいいカルチャーギャップを一番感じたのは、やはり食事についてだった。ホストファミリーの基本的な朝食は、揚げ物にヨーグルトと卵、そしてたまにホットケーキだ。朝からお米などを食べている私は「なんてヘビーな食事だ」とホストファミリーと笑い合い、とても楽しい時間を過ごせた。そしてアメリカとしての食文化の差だけでなく、イスラム教の食事としての宗教的な違いを感じることもできた。彼らは信仰上の理由から豚肉を食べない。私も滞在中、一度も豚肉を食べなかったが、思いのほか困ることはなかった。そして食事に関して一番驚かされたのは、最終日に食べたアメリカンサイズのピザだ。身長 170 センチの私の上半身と同じくらいの大きさのピザを家族全員で食べた。一日では食べきれないと思ったが、11人の大家族だったので気づけばなくなっていた。彼らの食に対する情熱は凄まじいものだった。たくさん食べ、たくさん学び、たくさん知った、短い8日間のホームステイだった。

お別れの時に「またアメリカに来る時は必ずうちに帰ってきなさい。ここはあなたの第二の家よ」と言ってもらえたことが本当に嬉しかった。ホストファミリーの温かさを感じながら、私はホテルへと向かった。またアメリカに行くことがあったら、必ずお世話になったホストファミリーに、今度は自分の稼いだお金で、会いに行こうと思う。



平川 菜央

私は今まで1人で家以外の場所で1週間以上滞在することがなかった。そのため海外、ましてやホームステイなど想像できず、不安が大きかった。そんな私が楽しくアメリカで過ごすことができたのは、ホストファミリーのWard家のおかげである。

ホストシスターであるMakennaは私が滞在していた1週間の間にブラスバンドの本番と化学の大会を控えており多忙の中、毎日交流をしてくれた。特に楽しかったのは部活についてたくさん話したことである。私も吹奏楽部に入っているため、練習の様子や部活の仲間との関係が伝わる写真や動画を紹介しあってとても盛り上がった。学校に行く道中では車を運転してもらいながらオススメの曲を聞かせてもらい、学校についた後は音楽室に連れて行ってもらった。そこでは彼女が所属しているバンドの顧問の先生や同級生と関わることができ、演奏まで披露してもらった。また、家が近い部活の友達と3人でポテトスープを作ったりボードゲームをしたりした。Makennaやその友達は私の拙い英語に合わせてゆっくり話したり、簡単な単語を使ってくれたため会話を続けられてとても嬉しかったが、自分の英語力の未熟さに悔しくなった。休日のうち土曜日はMakennaが科学の大会だったためホストマザーと買い物に行った。アメリカのスーパーは想像以上に広く、そのような店が何件も集まっていると聞いてとても驚いた。次に連れて行ってもらったインテリアのお店は、様々な種類の家具や小物が売られており見るだけで楽しかった。ホストファミリーの家には多くの絵画が壁に飾られ、照明やソファひとつひとつがどれもおしゃれだったのは、こうしたお店をたくさん知っていて選んだり集めているからなんだろうなと感じた。昼ごはんではBBQ、夜ご飯では様々な国の食べ物が集まる場所に連れて行ってもらいどちらも初めて食べるものばかりで新鮮だった。ホストマザーもホストファザーも一緒に過ごしている間、たくさん質問してくれたため、話が途切れることがなかった。2人は特に日本の行事について興味を持っており、クリスマスの過ごし方や年末に家族と何をしたかを共有した。ホストファミリーと過ごす最後の日である日曜日には、みんなでドライブをした。途中でアイス屋に寄った時、サプライズでアメリカのギフトを渡された。その中に「My family」という意味のモールス信号をモチーフにしたブレスレットを見つけたときは、泣きそうになってしまった。別れる時には一緒

に写真を撮り、幸せな8日間を思い出して寂しくなった。

私を本当の家族のように優しく受け入れてくれたホストファミリーには感謝してもしきれない。こんなに素敵な経験ができたのは Ward 家や学校で関わってくれたたくさんの人たちのおかげである。日本に帰ってからも連絡を取り合
って、いつかまた会いたい。



山本 雪乃

私のホストシスターである Jade とは派遣前からよく話していた。しかしオーランドに着いてホストファミリーに会った時には嬉しさもある中で緊張してしまっていたので、上手に話すことができなかった。それでもホストファミリーはそんな私を温かく受け入れてくれてとても安心した。私が困っている時にはわかりやすい言葉でゆっくり話してくれた。お互いの趣味などたくさん話して行くうちに緊張も解けて楽しい日々を過ごすことができた。しかし、初めての海外で慣れていなかったのか、少し体調が優れない日が2日間くらいあった。それも出会って2日目くらいだったので困らせてしまうかなと思ったけれど、伝えてみると、全員が私に寄り添ってくれた。食事でも体調が良くなるよう、体に優しいものを出してくれた。私が治るまでずっと気にかけてくれてとてもいい家族だなと実感した。

また Jade の友達も今回一緒に行った派遣生のホストファミリーだった。なので、毎日の学校の登下校は一緒に行っていた。登校するときも下校する時にも話しかけてもらうことが多かったので自分からも話しかけようと思い何気ないことでも話してみると会話を広げてくれたのでとても嬉しかったし楽しい時間だった。でもこの貴重な経験ができているのだからもっと積極的になれば良かったなと少し後悔している。

放課後はショッピングに行くことが多かった。その時も、色々と説明してくれたり、用事が終わっても私のために、回ろうと言ってくれて、好きなものや食べてみたいものも選ばせてくれた。休日は4人でピクニックやスケートをした。朝カフェに行く時、Jade が車を運転していた。アメリカでは16歳以上は免許取れることだったので普通なことだけど日本では18歳以上でないと運転できない。同い年の子が運転している姿はとても新鮮でかっこよかった。このことも文化の違いでもあり、いいところでもあると感じた。ピクニックでは、一緒に作ったサンドウィッチを食べたりアスレチックで遊んだり自然に触れ合っていた。この1日でもっともっと仲良くなれたと思う。

次の日は Jade の習い事の友達とバスケットをしに行った。バスケットは少々だったのであまり上手できなかった。それでもみんな私を褒めてくれて嬉しかった。その日で Jade と過ごす最後の日であり、半日くらいしか一緒にいられなかったけれど、この8日間で仲良くなれて嬉しかった。

そしてホストファミリーとお別れする時。一緒に過ごした 8 日間の濃い思い出が蘇ってきて号泣した。離れ離れになるのが辛くてもっと一緒に過ごしたかったなと思った。しかし、ホストファミリーのおかげで今回の派遣事業の全てが一生の思い出になった。さらに 6 月に日本を訪れることを聞き、日本で会う約束をすることができた。私はそれまでにもっともっと英語を上達させて日本の素敵な所に案内したい。こんなに素敵な家族や優しい友達に出会えて本当に幸せだなと思った。



樋口 理帆

今回の海外派遣を通して、異文化交流の意義とその魅力を深く実感した。まず、ホストファミリーは初日から私を温かく迎え入れてくれ、とても居心地のよい環境を作ってくれた。そのような受け入れの姿勢は、異なる文化を持つ人同士が関係を築く上で非常に重要であると感じた。言語や生活習慣が異なる中でも、相手を思いやる気持ちがあれば安心して過ごすことができるということ、身をもって学ぶことができた。ホストファザーからは、「オランダにはさまざまな人種の人々が暮らしているため、多様な文化や言語に触れることができる」という話を聞いていたが、実際に現地で生活してみると、その言葉通り、多様な背景を持つ人々が共存しており、日本ではあまり経験できない新鮮さがあった。街や学校の中で異なる文化が自然に混ざり合っている様子は、非常に印象的であり、自分の視野が広がっていくのを感じた。また、それぞれの文化が尊重されながら共存している点にも強く惹かれた。

また、私のホストファミリーはブラジルにルーツを持つ家族であり、アメリカにいながらブラジル料理を味わったり、ポルトガル語を教えてもらったりする機会があった。このように一つの国の中で複数の文化に触れられることは、日本ではあまりない経験であり、異文化が重なり合う社会の特徴を実感することができた。

さらに、私が特に日本との違いを感じたのは言葉遣いである。日本では「ありがとう」と言われると「どういたしまして」と返すのが一般的であるが、現地では「of course」や「perfect」といった表現がよく使われていた。これらの言葉は相手に対する肯定や思いやりが強く感じられ、何気ない会話であっても温かさを感じることができた。このようなコミュニケーションの違いは、文化による価値観の違いを反映しているのではないかと感じた。加えて、ホストファミリーは毎日、学校から帰宅した私に「今日はどんな一日だった？」と優しく声をかけてくれた。その際も、私が理解しやすいように簡単な英語でゆっくり話してくれるなど、常に配慮を感じることができた。このような日常的なやり取りを通して、言語の壁を越えて心を通わせることの大切さを学んだ。

今回の経験から、異文化交流とは単に違いを知るだけでなく、その違いを受け入れ、互いに理解し合う過程であると強く感じた。今後もこの経験を生かし、多様な価値観を尊重しながら人と関わっていきたい。

静谷 匡

アメリカについてから、ホストファミリーの Alexis と会うまで、特別、緊張することはなかった。けれど、実際にあってみると、事前に知らされていた 4 人よりも多い 5、6 人が待っていることに気づき、始めは動揺した。すぐに、Alexis の友人も来ていることを知って、友人関係の厚さを感じさせられた。

初日は、ゲームを一緒にやったり、アニメについての話をしたりしたが、自分が思っている以上に、Alexis が日本のアニメや漫画を知っており、自分が逆にわからないことが多く、アメリカでの日本文化の浸透度を身に沁みて感じた。友人たちとの会話の多くがネットのアニメの話題であったこともあり、話についていけないことも多々あった。そんな中で、Alexis からアメリカでの様々なスラングを教えてもらった。例えば、sliming your homeboy、意味は、親友を裏切ってボコボコにするときに使う言葉らしいが、Alexis を含め友人たちが笑いながら説明してくれた。

また、Alexis の仲のいいエリーナには、Alexis と一緒に NBA のチームのオーランドマジックの試合や、ディズニーワールドなどいろいろな場所につれて行ってもらった。自分はバスケット好きということもあり、バスケットの本場アメリカの NBA の試合を見ることができ、本当に幸せだった。ディズニーワールドに遊びに行った時には、マジックキングダム、エプコット、ハリウッドの 3 パークを往復して、丸一日遊び、くたくたになってエリーナが床に倒れたのが印象に残っている。

午前中の研修を終えて戻り、午後、家に戻ってから、Alexis の友人のジャyson、ジョバーニ、アンドレスの 4 人でバスケットをやって盛り上がったことが、楽しい思い出になった。家での食事は、Alexis の家がメキシコ系であることからメキシコ料理であり、どれも美味しかった。会話のほとんどがスペイン語であるため話している内容はわからなかったが、高校での授業の間に Alexis からスペイン語を教えてもらった。毎日の授業前に、Alexis が友人に対して必ず好きなものをあげる気配りを見せていて、日々のちょっとした気遣いが、友人関係の広さにつながっているのかもしれないと思った。

Alexis との食事の中で、印象に残っているのが、フォークとナイフを使って食べないといけないくらい大きなピザを食べたことだ。見た目にして、軽く

食べられたことに驚きつつ、アメリカンサイズを実際に体験することができた。

Alexis たちとの会話の中で、みんな声の調子や、表情がとても豊かな人が多いなと感じた。高校で、Alexis がニワトリを見に行った時に、Alexis のニワトリの声真似がとても似ていたことが今でも、耳に残っている。アメリカの人たちは、陽気な人たちが多く、コミュニケーションをとっていて、何を考えているのかとてもわかりやすかった。

一週間という長いようでとても短い生活の中で、Alexis の家族、エリーナ、ジョバーニ、コーピンス、アンドレス、ジェイソン、コーツといった、たくさんの人たちと共に生活をし、自分がわからなかった時にわかりやすい言葉で説明してくれたり、体を使ってわかりやすく喻えたりしてくれたり、優しく、楽しく接してくれたことは、今後自分の生活にも反映していきたいと思った。別れの車の中で、Alexis のお母さんが「私たちの家は、あなたの家でもあり、あなたも私たちの家族だよ。」と言って温かく最後まで、受け入れてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。

将来、アメリカにもう一度渡り、次回会った際に、思い出話として笑って英語で会話ができるように、もっともっと勉強をしていきたいと思った。



原 彩華

私は、17 歳の Taylor、15 歳の Morgan、ホストファザーの Terry、ホストマザーの Michelle と犬 2 匹の Sammy と Flash にお世話になった。

Taylor はいつも私が会話できなくてもよく話しかけてくれてとてもうれしかった。アメリカでは 16 歳から車の免許を取得出来るので、家から学校までや放課後どこか遊びに行くことがあったらいつも運転してくれて歳が近いのに車を運転できるのがとてもかっこいいと感じた。Taylor は Taylor Swift が好きでよく運転しながら聴いていて、私は Taylor Swift を聴かないので初めて聴いた曲ばかりだったが、Taylor のお陰でお気に入りの曲に出会うことができた。私は Bruno Mars が好きでアメリカで彼は人気だから彼の曲を車のなかで一緒に歌ったのがとても楽しかった。

Taylor とは海に興味があるというところが同じで、放課後 Morgan、Taylor と Orlando にある SeaWorld へ行った。SeaWorld には普通的水族館と別にジェットコースターがたくさんあり、私たちは3つのジェットコースターに乗った。ジェットコースターがあまり得意ではない私は終始ずっと叫んでしまい、降りた時 Morgan と Taylor に叫びすぎと笑われ、会話が上手くできなくても笑い合えることが出来るんだと感動した。何故 SeaWorld に行ったかという、自分がアメリカに行く前から Taylor と WhatsApp で話しており、SeaWorld のレストランに行きたいと言ってあったので、連れて行ってくれた。そのレストランにはサメが泳いでいて、Taylor がサメ好きなのでとても楽しそうでも私もサメが好きでお互い好きなもので楽しめてとてもいい思い出になった。

夜にはよく家族みんなでマリオパーティで遊んだ。Michelle と Taylor はミニゲームがとても得意で、私はあまり得意じゃなかったのでよく負けてしまったけどとても盛り上がって楽しかった。家のごはんもとても美味しくて、1 番美味しかったなと印象深かったのは、ホストファミリーみんなで作ったリングのデザートで、とても甘かったのと作った思い出が強かった。その他にも、Morgan と私は辛いものが好きなことが同じだったので辛いチキンを食べに行った。そこで一口でチキンを食べる方法を教えてもらい、日本に居たら知れないことを教えてもらいとても面白かった。

最後の日にはお別れのときに泣いてしまい、絶対にまた会いたいなと感じた。

オーランド市役所

松田 佳奈

本海外派遣において訪問したオーランド市役所での学びは、行政の在り方や国際交流の重要性について深く考える契機となった。事前学習において、日本の浦安市役所は、住民サービスを中心に、福祉、教育、都市整備など、幅広い行政サービスを直接提供していることを学んだ。一方で、オーランド市役所はアメリカの大都市における行政機関として、浦安市より大きな規模で都市計画、治安維持、経済振興など幅広い分野を担っている点が特徴的であると理解していた。

実際に訪問して感じたことは、その機能の多様性だけでなく、市役所そのものが都市の象徴的な存在として位置づけられている点である。ダウンタウンの中心部に位置する建物は近代的で開放的な設計がなされており、単なる行政機関にとどまらず、市民にとっての文化的・公共的空間としての役割も果たしていると感じた。建物内1階には誰でも入れる常設のアートギャラリーが設けられているなど、市役所が文化発信の場としても機能している点は、日本の一般的な市役所とは異なる特徴である。

また、オーランド市の行政において特に注目すべき点は、多様な背景を持つ市民に対応するための取り組みである。多民族・多文化社会であるオーランド市においては、人種や言語、文化の違いを前提とした行政サービスの提供が求められている。そのため、多言語での情報発信や、英語を第一言語としない住民への配慮がなされていると考えられる。このような取り組みは、「すべての人に同じサービスを提供する」という平等の考え方だけでなく、「それぞれの状況に応じて最適な支援を行う」という公平の視点に基づいていると感じた。

さらに、行政サービスのデジタル化と効率化も重要な特徴である。事前学習において、オーランド市ではオンラインで完結する手続きが多く、市役所に直接足を運ばなくてもサービスを利用できる仕組みが整備されていることを知った。これは窓口対応を中心とする日本の行政とは対照的であり、市民の利便性向上と行政運営の効率化の両立を目指した取り組みであると考えられる。このような仕組みは、広大な国土と多様な住民を抱えるアメリカ社会において合理的に機能していると感じた。

訪問当日は市長に直接お会いすることは叶わなかったが、代わりに対応してくださった Tony Ortiz 市議員との交流が非常に印象に残っている。Tony

Ortiz 市議員は終始フレンドリーに接してくださり、私たちに積極的に話しかけてくださっただけでなく、浦安市についても事前に詳しく調べてくださっていた。その姿勢から、相手の背景や文化を理解しようとする意識の高さを強く感じた。国際交流においては、自らの文化を伝えることだけでなく、相手について深く知ろうとする姿勢が不可欠であることを改めて実感した。

以上の経験を通して、行政の役割は単にサービスを提供することにとどまらず、多様な市民を包摂し、都市全体の発展を支えるものであると理解した。また、国際的な場においては、相互理解と尊重に基づいたコミュニケーションが重要であり、その基盤となるのは相手に対する関心と理解の姿勢であると学んだ。今回のオーランド市役所訪問で得た知見を今後に活かし、多様な社会に対応できる広い視野を持った人材へと成長していきたいと考える。

University of Central Florida (UCF)

飴谷 颯大

UCF は 1969 年に開講されたアメリカ最大級の大学だ。学生数は約 7 万人で、その 5% は留学生、日本人の留学生も 150 人ほど在籍している。R1 大学にも指定されているアメリカでも屈指の研究実績を誇る大学であり、また 12 の学士号、98 の修士号、34 の博士号、3 つの専門学位の豊富な学位プログラムで学生の研究活動も広くサポートしている。

キャンパスの中は、学問領域ごとに棟が分かれている。また 5 階まである大きな図書館や体育館やプールまで完備するジム、さらに UCF の中心に位置する Student Union という建物には何店舗もあるフードコートや、さまざまな分野の学生相談のコーナー（クラブ開設の相談など）といった学生をサポートする部門も充実している。

UCF Global という留学生をサポートする部門もある。英語が難しい学生のためのイングリッシュプログラム、さらにそのイングリッシュプログラムと試験を通じて、UCF の本科へと進学することが可能になっている。またパスウェイプログラムというアメリカ生活に慣れてもらうための支援プログラムもあり、学生が異国の地での教育・研究活動を円滑に進められるように充実した支援が行われている。

地域との連携も活発に行われている。オーランド市との連携事業で、UCF に在籍する学生がオーランド市の地域センターで地域住民向けに無料の英語教室を開講したり、シニア向けのコンピューターリテラシー教育にも関わっている。また、近隣のケネディスペースセンターやウォルトディズニーワールドリゾートなどとも連携し、独自のプログラムや研究、インターンシップも行われている。

大学敷地内にはアリーナとスタジアムがあり、アリーナは約 1 万人、スタジアムは最大約 4 万 5000 人まで収容可能。アメリカの学校はスポーツイベントが活発で、高校や大学ではバスケットボールやアメリカンフットボールといったスポーツの試合が盛んに行われている。特に、アメリカンフットボールの試合日には授業が休講になるほど盛り上がりを見せる。またアリーナはスポーツの他、音楽のコンサートや卒業式の会場にも利用される。

UCF では、日本とアメリカの大学の違いだけでなくそもそもの大学に対する考え方で大きな違いを感じさせられた。

上述したように、日本と比較して大学がとても大規模である。日本の場合、地方だと都市部に比べて広い敷地を持つ大学も存在するが、それでもここまで学生生活のみならず、日常の生活インフラまで学内に備えられた大学はほとんど存在しない。基本的には講義や研究を行う建物を中心に、学食や売店・コンビニなど設備がコンパクトである場合が多い。

この違いは、もちろん日本とアメリカを比較した際に、土地や人口の規模が大きく異なるという要因もある。しかしそれだけでなく、それぞれの国における大学という存在への考え方が違うのではないかと考えた。

日本では、大学というものはただ教育、研究機関として成立しているため、日常生活とは隔てられて作られているのではないかと考えた。反対にアメリカは、教育機関だけでなくさまざまなハブとして研究・教育業界のみならず、スポーツや地域などさまざまな分野に対しても大きな繋がりや影響力を持つ存在になっているのではないかと考えた。

アメリカの大学について実際に見たり、現地の人々から話を聞いたことで、アメリカの良さ、そして改めて日本の良さ、それぞれを学ぶことができた。しかし、教育・研究施設としての充実度はやはりアメリカの方が上回っている気がした。生徒への支援などは教育施設としてとても重要な要素であるだろう。それゆえ、教育・研究設備や環境は日本もこれから改善できる余地があるのではないかと感じた。逆に、日本は学生がより自由に、集中できる環境で学業を修められるのではないかと考えた。大学施設が教育、研究が中心である分、学内に囚われずにアルバイトやサークル活動など、自由にやりたいことへ集中できるのが良さであると感じた。それぞれの良さを学んだことを活かし、より良い教育とは何なのかということ意識しながら、これからも学生として学業を修めたい。



学童というより小さな学校のような印象を受けた。私も学童に通っていた時期があったが、日本の学童とは大きく異なることが分かった。音楽室や美術室、クッキングルーム、コンピュータールームなどがあり、子どもがやりたいことを全力でできる場所であった。また、e スポーツにも積極的で、Switch や PlayStation が置いてあることに衝撃を受けた。日本では親からの批判や、壊してしまう心配などから導入が難しいのではないかと思う。そのため、勉強以外の分野でも将来活躍できるようにゲームが用意されているのは、アメリカならではのと感じた。自分で料理を作ったり、楽器を演奏したりと、子どもの選択を尊重していることが伝わってきた。この施設は子どもにとっても親にとってもとても良い場所だと感じた。

さらに、土地の面積が広いと、規模が日本とは比べものにならないほど大きいことが大きな違いだと思う。私が通っていた学童では、小さな校庭や遊具があったものの、人数が多く全員では遊べなかったため、近くの公園に行くこともあった。一方、アメリカの学童には広くて大きな体育館があり、外には庭園もあって、自分たちで菜園ができる点がとても魅力的だと感じた。

また、規模が大きいため子どもの人数も大きく異なる。日本では基本的に 40 人以下とされているが、アメリカでは 100 人以上が利用することもあるという。その理由として、規模の大きさに加え、12 歳以下の子どもが 1 人で外出したり留守番をしたりすることが禁止されている点も関係していると思う。そのため、学校が終わった後に学童に通う子が多い。さらに、小学生だけでなく幼稚園児から 18 歳までと幅広い年齢の子どもが通っているため、年齢差を超えた交流が生まれている。上の年齢の子が下の子の面倒を見ることもでき、日本の学童にも取り入れた方がいいと感じた。

ディズニーのアトラクションを考える際に、学童の子どもたちの意見を参考にすることがあると聞いた。子どもの視点ならではの発想は、大人には思いつかない新しいアイデアにつながると思うし、自分の意見が取り入れられることで子どもたちの自信にもつながると感じた。

プレゼンテーションをした際には反応がとても良く、話を聞きながらリアクションをしてくれたり、質問があると積極的に手を挙げてくれたりした。その姿を見て、私もこのような積極性を身につけたいと思った。また、B グループが

漫画やアニメをテーマに発表していたが、「ワンピース」「ドラゴンボール」「鬼滅の刃」「呪術廻戦」などがアメリカでも人気であることは知っていたものの、小学生の子どもたちまで知っていることに驚いた。同時に、日本の文化が世界に広がっていることを実感し、嬉しく感じた。

子どもたちは緊張している様子もあったが、積極的に話しかけてくれる子や、こちらの問いかけにしっかり応えてくれる子が多く、さらに自分たちから質問してくれる場面もあった。もし自分が同じ立場だったら、うまく話せないと思うので、その姿勢はとても印象的であり、見習いたいと感じた。

今回の経験を通して、環境の違いが子どもの成長や考え方に大きな影響を与えることを実感した。日本とアメリカそれぞれに良い点があり、それらを取り入れることでより良い教育環境をつくることができるのではないかと思う。今後は今回学んだことを自分の生活や考え方にも活かしていきたい。

Orlando Fire Department

高橋 和洋

私は Orland Fire Department への訪問について報告する。見学に先立ち、浦安市消防本部でヒアリングをさせていただき、日本とアメリカの消防体制を比較するという視点をもって現地に臨んだ。浦安市消防本部の方からは、アメリカは建物構造が日本と異なるため、消防活動の方法にも違いがあるかもしれないので、その点に注目して見学するとよいと助言をいただいた。この言葉を意識して見学したことで、現地での学びをより深くすることができた。

まず、浦安市消防本部では勤務体制は2交代制で月平均11回勤務していること、年間の火災件数は約48件、救急出動は約1万1,000件であることを教わった。特に印象に残ったのは、少子高齢化の影響で救急出動が増加しているという点である。また、救急対応では消防隊が救急隊を支援するPA連携が行われており、心臓マッサージや荷物の運搬などを担当していると知った。さらに、署員全員で料理を作り、一緒に食事をする文化があることも伺った。食事の時間は単なる休憩ではなく、情報共有や信頼関係を深める大切な時間になっていると分かり、消防の仕事は日頃のチームワークによって支えられているのだと感じた。

今回、実際に訪問したのはオーランド市内19署のうちのステーション6である。勤務体制はA・B・Cの3交代制で、24時間勤務、48時間休みのサイクルだという。1日の出動件数は15～20件ほどで、その約80%が救急対応であり、この点は浦安と共通していた。一方で、消防士と救急救命士は別資格・別採用で分担されており、全車両にパラメディックが乗車する体制が整えられていた。また、オーランド消防署は全米でも高い評価を受けており、隊員の方々が強い誇りをもって働いていることも伝わってきた。

浦安市消防本部で伺っていた建物構造との違いについても、現地で具体的に学ぶことができた。オーランドでは平屋の建物が多いため、建物の構造に合わせてホースの長さや巻き方を準備していると説明を受けた。事前に聞いていた内容が、実際の消防活動の工夫として確かめられたことが特に印象に残った。見学の中で特に印象に残ったのは、説明中に実際の救急出動要請が入った場面である。アラームが鳴ると、隊員の方々は慌てることなく、落ち着いた様子で素早く準備を整え、すぐに署を出ていった。その姿から、緊急時ほど冷静さが求められる仕事であることを実感した。

また、95 フィートのはしご車のバケットに乗せていただいた際には、上空から見えるオーランドの街に高い建物がほとんどなく、平たく広がっていることがよく分かった。この体験によって、事前に聞いていた建物構造の違いが、街並みや消防活動の違いにつながっていることを自分の目で理解することができた。

さらに、勤務中に消防車でスーパーへ買い物に行くことがあると聞き、最初は驚いた。しかし、それは常に車両と一緒に行動し、どこにいても出動要請があればすぐに現場へ向かえるようにするためだと知った。日本ではあまり見られないが、即応性を最優先するオーランド消防署の合理的な考え方が表れていると感じた。

今回の見学を通して、日米の消防には共通点と相違点の両方があることを学んだ。救急対応の重要性や、署員同士が食事を共にしながらチームワークを築いている点は共通していた。一方で、勤務体制や資格制度、役割分担には大きな違いがあり、それぞれの地域の建物や街の広がり、生活様式に合わせて消防の仕組みが作られていることが分かった。特に、浦安市消防本部で事前に聞いていた建物構造の違いを、オーランドでホースの運用や街並みの特徴と結びつけて理解できたことは、大きな学びだった。

今回の経験から、消防とは火を消すだけではなく、地域の特性に応じて人々の命と暮らしを守る仕事なのだと改めて実感した。

【参考】浦安市消防本部とオーランド消防署の比較

比較項目	浦安市消防本部	オーランド消防署
勤務体制	2交代制（月11回）	3交代制（24時間勤務）
年間救急件数	約1万1,000件	1日15~20件 （約80%が救急）
消防・救急の関係	PA連携で支援	別資格・別採用で分担 全車両にパラメディックが乗車
はしご車の高さ	約40m（13階相当）	約29m（95フィート）
食事文化	全員で一緒に食事	全員で一緒に食事



Beardall Senior Center

ランジャン イシャン

私たちはオーランドに滞在中、Beardall Senior Center という高齢者施設を訪問した。そこは高齢者の健康維持や機能向上を目的としており、かつて小学校として使われていた場所を再利用しているとのことだ。私たちはそこでダンスレッスンのクラスに参加した。初めは四拍子の曲に合わせて踊り、次第に足の動きだけでなく身振り手振りも混ざっていった。次に三拍子の曲を踊ったが、ここでは足の動きが特に難しく、皆苦戦していた。しかし、次の曲に移ると突然、坂本九の「上を向いて歩こう (SUKIYAKI)」が流れ始めた。ダンスの動きに戸惑っていた私たちも自然と笑顔になり、楽しく踊ることができた。しかし、その次の曲ではまた難易度が上がり、撃沈してしまった。

この施設の中では全員が積極的に体を動かしており、若者よりもパワーがあるのではないかと何度も思わされた。多忙なスケジュールで疲れていた私たちだったが、逆にそこから元気をもたらすことができた。ダンスを通し多様な人々と交流できたことを嬉しく思う。これも国際交流の一つの楽しみであることを忘れずに、これからもより多くの人と関わっていけるようにしたい。



ケネディスペースセンター(以後 KSC)は私の中で、もっと長く滞在したかった施設ランキング 1 位の場所である。とにかく規模が大きい。敷地は 567 平方キロメートル、東京都の面積の約 4 分の 1 に匹敵する広さである。その広大な土地に、宇宙に関して学べる展示が集まっている。また現在も使われている有人宇宙船の発射場やロケットの発射場もあるため、宇宙に最も近い場所と言えるだろう。

まず私たちは「Gemini 9A」という実際に Gemini 計画で宇宙を周回した小型機を見た。Gemini 計画とは、月面着陸のプロジェクト、アポロ計画に繋がる、地球周上を周回しながら、宇宙空間での生活を通して技術を実証するものであった。小型機には、地球に戻り大気圏を突入する時の跡がはっきり残っていた。他にもはじめに行ったビジターセンターには、多くのレプリカ、さらに実際に使われたものたちが展示されていた。屋外に陳列されたロケットたち、再現された司令室など見どころが豊富すぎて書ききれないのが残念である。

その中でも特に私が印象に残った展示は、スペースシャトルである。訪れた人は最初に小さなシアターに案内され、スペースシャトル制作秘話に関する映像を観ることができる。それを見終わると全面スクリーンの部屋に移動し、スペースシャトル発射の映像を見る。映像の終盤になりスペースシャトルが宇宙へ飛び立つと、前方スクリーンの向こう側に何かの影が見えてくる。それこそが今まで見てきた映像の主演である、アトランティス号である。この演出によって、アトランティス号が目の前に現れた時の感動は圧倒的だった。興奮を共有するかのようになり、自然と周りから拍手がおこった。映像を経て、自分が貴重なものを見ていることをより強く実感できた。

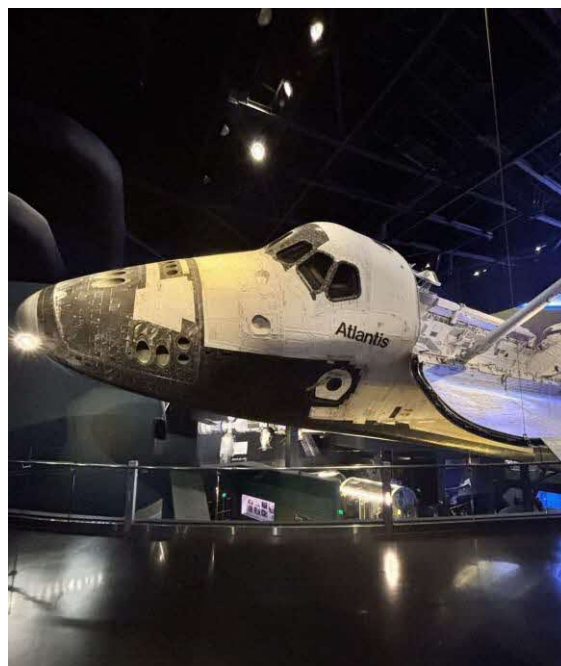
また私たちはバスツアーに参加した。バス内では備え付けのテレビで、施設や宇宙開発に関する最新情報が紹介されていた。途中に寄った展望台からは、複数の団体のロケットの発射場が一望できた。ニュースで話題の「スペース X」もここでロケットを発射している。見渡す限りそれ以外にはほとんど建物がなく、敷地の広大さがよくわかった。またシャトルの組み立て工場もバスから見ることもできた。この建物も想像ができないほどの大きさだった。平屋の形式だが高さは約 52 階分あり、壁のシャッターは世界一大きく全て開くまで 45 分かかるといわれる。施設の規模を表すために身近なものに例えてもらった

が、本当に大きすぎて現実味がなかった。

そしてバスを降り、アポロサターンVセンターを見学した。入ってすぐにサターン5の実物の展示があり大迫力だった。1つのエンジンに3人ほど入れそうだった。名前の通り、アポロも展示されている。時間の都合で、月面探査機や月の石に触れず心残りだった。

とにかく展示が多いが、アトラクションも多くある。私たちが体験したのは、スペースシャトルが地球に帰還した時の着陸の角度が体験できる滑り台である。思ったよりも急でありスリル満点だった。また私たちは体験していないが、スペースシャトルの打ち上げが重力や音での再現で体験できるアトラクションもあった。またIMAXを有した大きな映画館やゲームセンターもあり、遠足で来ている子ども達や家族連れも多くいて、日本の科学館とは異なるテーマパークのような一面を見た。その中で印象に残ったのは、宇宙飛行士の方々の功績を讃える展示が多いことである。スペースシャトルの事故で亡くなった人が紹介されている部屋では、一人一人の遺品や趣味が書かれていた。宇宙開発は科学技術の発展だけでなく、宇宙飛行士の方々が命を懸けて繋いできたものなのだと感じた。

KSCは宇宙に興味がある人はもちろん、あまりない人でも楽しみながら学べるように工夫されていた。実際に使われたものや本物に近いレプリカの展示で、宇宙を身近に感じられてとても貴重な経験だった。月面着陸に向けた新たな計画、アルテミス計画の動向に注目したい。



私たちは5日目にディズニー・アニマルキングダムを訪れた。フロリダ州には、ウォルトディズニーワールドとしてマジックキングダム、エプコット、ハリウッド・スタジオ、そしてアニマルキングダムの4つのパークがある。これらは世界最大規模となっており東京ディズニーリゾートの約58倍と言われている。さらにどのパークでも毎年イベントが開催されるがシンプルで毎年あまり変わることがない。それは初めての来園者にも本来の様子を楽しんでもらえるような工夫となっている。

営業時間もパークによっても月によっても違うことがある。例えば今回訪れたアニマルキングダムでは3月は大体8時から19、20時まで営業している。しかし5月になると8時から18時になることが多いのだ。

今回訪れたアニマルキングダムは4つのパークの中でも最も広いパークであり、約300種・約2000頭以上の動物が過ごしている。これらの動物は保護されながら生活している。保護したり教育したり研究しているのはウォルト・ディズニーの姿勢を反映させたものなのだ。そしてパークは「アメリカ動物園水族館協会(AZA)」の認定を受けている。ここはアトラクションを楽しむことだけでなく自然や動物についても考えて楽しむパークだと知り、とても興味深く新鮮だった。そのため来場者の中には自然や動物を観察するために来場する人もいるのだという。

アトラクションの一つであるキリマンジャロ・サファリに乗るとシマウマやキリンからフラミンゴなど様々な動物を目の前で見ることができる。陸上で過ごす動物から乾燥した地域で過ごす動物、さらに水辺で過ごす動物など環境が違う中でありながらも一つのアトラクションで全てを見ることができ印象に残った。

またパーク内を歩いていてもリスがそばまで寄ってきたりした。そのような動物を探しながら回ることも楽しめると感じた。日本ではあまり見られない光景に感動した。

アニマルキングダムで1番人気と言われているアバターにも乗ることができた。私自身アバターを見たことがなかったけれど、まるで世界間に入り込めたかのように内容も掴みやすくとても楽しかった。これをきっかけにアバターの映画にも興味を持つようになった。今度アバターを見てみようと思う。

どのアトラクションも待ち時間が短くほとんどが30分あれば乗ることができた。それはリゾート内に4つパークがあるからこそ来場者は散らばるからなのだと分かった。毎年約5000万人が来場するディズニーでもすぐに乗れたのはとても嬉しかった。短い時間でもたくさんのアトラクションに乗ることができ、また、2回目でも楽しむことができた。

今回本場のディズニーに訪れてみて、日本との違いをよく知ることができた。パーク内のアジアを再現された街並みがとても気に入った。同じディズニーでも街並みやイベントのテーマはそれぞれ違い、アトラクションの題材もそのパークにあったものを使っていた。そのため東京ディズニーランドやシーでは味わうことのできないアニマルキングダムだけの雰囲気を楽しむことができた。今回は1つのパークに行くことができたので、またオーランドに訪れた際には、他の3つのパークに行きたい。他の3つのパークに実際に行けた時にはパークそれぞれの違いについても自分なりに見つけられたらいいと思う。オーランドにはディズニーだけではなくユニバーサルスタジオなど他にも魅力あふれる観光地がたくさんあるのでそこにも行きたい。



今回、ドクターフィリップス高校に約 5 日間通うという貴重な経験を通して、日本の高校との違いや共通点について多くの学びを得ることができた。特に印象的であったのは、授業における発言の自由度とその頻度の高さである。日本の高校でも近年はグループワークが増え、班の中で意見を交換する機会は多くなっている。しかし、クラス全体の前で自分の意見を発表したり、教師と対等に意見を交わしたりする場面は決して多いとは言えない。それに対して、ドクターフィリップス高校では、授業中に生徒が積極的に発言することが前提とされており、自由に意見を述べることができる雰囲気は自然に形成されていた。このような環境は私にとって非常に新鮮であり、主体的に楽しむことができた。

私が受講した国語の授業では、詩を題材としながら創作活動を行うという内容であった。授業の冒頭で提示された条件に基づき各自が詩を作成し、次の授業でそれをクラス全体の前で朗読する。そして、教師や生徒同士がそれぞれの作品の良い点について意見を出し合い、より良い表現へと推敲していく。この一連の流れは非常に印象深く、単に知識を学ぶだけでなく、自ら表現し、他者と共有しながら学びを深めていくという姿勢が強く感じられた。

また、自習の時間においても特徴的な点が見られた。生徒たちは各自の課題に取り組みながらも、日本から来た私たちに積極的に話しかけ、交流を深めようとしてくれた。そのおかげで、多くの新しい友人を作ることができ、異文化理解の面でも非常に有意義な時間を過ごすことができた。

さらに、学校全体の施設面においても日本との大きな違いを実感した。ドクターフィリップス高校は非常に広大な敷地を有しており、校内には小規模な牧場が設けられているほか、芸術を専門的に学ぶための専用棟や、学問分野ごとに分かれた建物が整備されていた。このような環境は、生徒一人ひとりの興味や関心に応じて多様な学びを実現できる場であり、自分のやりたいことを模索するのに適した環境であると感じた。加えて、校内には様々な人種の生徒が在籍しており、多様な文化や言語が日常の中に自然に溶け込んでいる点にも強く惹かれた。日本では、肌の色や文化的背景が異なる友人と日常的に関わる機会は決して多くないが、アメリカではそれが当たり前の環境として存在している。そのような中で過ごすことは、異なる価値観や文化を理解するうえで非常に有意義であり、自分の視野を広げる大きなきっかけになると感じた。

今回の体験を通して、日本と海外の教育にはそれぞれ異なる特徴があり、どちらにも長所があることを実感した。このように両者を比較しながら学ぶことができた今回の経験は、今後の自分の学び方や将来の進路を考える上でも非常に意義深いものであった。



プレゼンテーション (URAYASU DAY)

静谷 匡

今回の派遣では、A、B、C、の3つのグループに分かれてアメリカにはない、日本の文化や学校生活の特徴についてのプレゼンテーションを行った。

Aグループの発表は、日本の学校における給食やお弁当についての説明だった。日本の小中学校における、クラスのみんなで班を作りご飯を共に食べる「給食文化」、自宅から持ってきたお弁当を友達と一緒に食べる高校での昼食風景を、給食やお弁当の実際の画像を見せながら説明した。アメリカにおいては、カフェテリアでの食事や、ハンバーガーやピザなどの文化を紹介した。スライドの中で、アメリカと日本の食の文化の違いの背景にも触れ、日本とアメリカの明確な差をとらえて、見ている人たちも真剣に聞いているようだった。

Bグループは、日本の漫画とアニメの音楽について発表を行った。まず、日本の有名な漫画を3つ紹介し、その後、“呪術廻戦”、“進撃の巨人”、“ワンピース”、といった日本で有名な漫画を、画像とともに説明した。また、日本の最も長い漫画は、ゴルゴ13の218巻であるらしい。そして、日本における漫画のコマの進み方と、アメリカにおける漫画のコマ進み方についてクイズ形式で説明した。発表の中でも、特に、アニメの紹介で盛り上がっていた。漫画と同様に、アニメも、“鬼滅の刃”、“僕のヒーローアカデミア”、“となりのトトロ”の3つを紹介し、それとは異なる、日本のアニメの曲を紹介することで、見るだけでなく、耳でもわかりやすく紹介したが、見ている人たちはみんなそれらのアニメ等について、知っているようであった。

Cグループは、日本のさまざまな部活動についての紹介の発表を行った。まず、自己紹介と各所属している部活動を発表した後、個人の部活動の具体的な説明を行った。1人目の部活動は軽音部で、バンドを組んで作曲をしたり、放課後に毎日スタジオに通い技術の向上に勤しんだり、ライブのイベントを自分たちで作ったりすることで、チームワークの向上に繋がっているとのことだった。2人目の部活動はバスケット部で、自分の部活動を、“バスケット部”、“テニス部”、“サッカー部”の3択で、ジェスチャーを交えながらクイズを出すと、ほとんどの人がテニス部に手を挙げ、騙されていた。バスケット部では、主にオールコートシュートやディフェンスドリルなどを通じて、チームワークと絆を深めているようだった。また、有名なアニメ、スラムダンクの言葉を紹介した。3人目の部活動は水泳部で、マネージャーの仕事を紹介した。具体的に

は、各人のタイムの測定と、結果の記録フォームの確認用の録画をやっていることなどを説明した。そのほかにも、鉄道研究部や、クイズ研究部、カルタ部など日本のユニークな部活動を紹介した。

どのグループも、日本の文化の特徴を踏まえつつ、馴染みやすい形で紹介を行っていて、興味を持って聞いていた人が多く見られたと思う。

このプレゼンテーションを通じて、現地の高校生に、より日本の文化に興味を持ってもらえたのではないかと感じた。

Orlando Wetland

原 彩華

ウェットランドとは、地面が常に水分を多く含み、湿った状態にある土地のことを指す。湖や沼、湿地林、干潟などがこれに含まれ、陸と水の間のような特徴を持つ環境である。このような場所は一見するとただのぬかるんだ土地のように見えるかもしれないが、実際には多くの生き物が暮らす非常に重要な場所となっている。特にアメリカのフロリダ州オーランド周辺には広大なウェットランドが広がっており、日本とは異なる規模と特徴を持つ自然環境が見られる点がある。

日本にもウェットランドは存在しており、その代表例として釧路湿原が挙げられる。釧路湿原ではタンチョウや様々な植物が見られ、自然の豊かさを感じることができる。しかし、日本のウェットランドは長い年月の中で農地開発や都市化の影響を受け、その面積が減少してきたという問題がある。一方、オーランド周辺のウェットランドは非常に広大で、自然の状態が比較的よく保たれている場所が多い。そこではアリゲーターやカメ、水鳥などが当たり前のように生息しており、自分たちはタイミング良く、フラミンゴのような見た目のベニヘラサギの子どもを見ることができた。日本ではなかなか見られない野生の迫力を感じることができる。また、オーランドでは観光資源としても活用されており、遊歩道や展望台があるため、安全に自然観察を行うことができる。このように自然保護と観光の両立が図られている点は、日本との大きな違いの一つだと考えられる。

オーランドウェットランドが持つ環境的な役割は非常に大きい。1つ目は、水質を浄化する働きである。一度処理された下水（再生水）を湿地に流し、湿地に生える植物や土壌が、水の中の汚れや有害物質を吸収し、きれいな水へと変えるという役割を果たしている。これは人工的な浄水施設にも似た機能であり、自然が持つ力の大きさを実感できる部分である。2つ目に、洪水を防ぐ役割がある。大量の雨が降った際、ウェットランドは水を一時的に蓄えることで急激な水位の上昇を抑え、周囲の地域を守っている。このような働きは都市部において特に重要であり、ウェットランドの存在が人々の安全な生活を支えていると言える。さらに、ウェットランドは多くの生物の生息地としても重要である。水辺と陸地の両方の特徴を持つため、魚類、両生類、鳥類、昆虫、植物など、さまざまな種類の生き物が共存している。

しかし現在は、ウェットランドは世界的に減少している。主な原因としては、都市開発、農地拡大、道路建設などの人間活動が挙げられる。日本でも同様に、多くの湿地が埋め立てられたり開発されたりしてきた歴史がある。また、最近では気候変動の影響も無視できない。気温の上昇や降水パターンの変化によって、水の環境そのものが変わり、ウェットランドの施設を維持することが難しくなっている地域もある。このような状況を考えると、ウェットランドは今後ますます重要な課題になると考えられる。

私はウェットランドに行ったことで、これまであまり意識していなかった自然の役割に気付くことができた。ウェットランドは目立つ存在ではないかもしれないが、水をきれいにし、災害を防ぎ、多くの生き物を支えるという点で、非常に価値の高い環境である。

今後はこのような自然環境を守るために、自分にできることを考えていく必要があると感じた。例えば、環境問題について関心を持ち続けることや、自然を大切にする行動を日常生活の中で意識することが大切だと思う。ウェットランドは私たちの生活と深く関わっている存在であり、その重要性を理解し、未来へ繋げなければいけないと思った。

13.英語による日本紹介 各グループの概要

○グループA

(1) メンバー

松田佳奈（リーダー）、飴谷颯大、太田結珠、高橋和洋

(2) テーマ

日本とアメリカの「食」の違いについて

(3) 内容

- 小中学校での昼食について
日本では給食文化があり、昼食を自分たちで配膳し、みんな一緒に教室で食べる。そして、食べる前に「いただきます」と言う。
- 高校での昼食について
日本では「お弁当」を自宅から持参する。両親が朝早く起きて毎朝作ってくれる。愛情と栄養バランスが詰まっており、お弁当を開ける瞬間は学校生活の中で一番幸せな瞬間である。
- 普段の食事の比較
アメリカのセットメニューでは、ピクルス抜きなど内容を自由に選ぶことができ、また、量が多い。
日本の定食では、白米、味噌汁、魚など、栄養バランスが重視されている。
- ホリデーの食事について
アメリカのサンクスギビングでは、大きなターキーを家族で囲んで、「今」あるものに感謝をする。
日本では、お正月におせちを食べて、「これからの1年間（未来）」が良いものになりますようにと願う。
- アメリカのお持ち帰り用ボックスについて
日本では生産者と作り手へ感謝の気持ちを表すため「いただきます」と言う。また、「もったいない」精神が根付いており、残さず食べるようにしている。そのため、アメリカの食べきれない分をお持ち帰りできる文化は効率的でよいと思う。

Daily Eats: What We Usually Eat	
USA	JAPAN
<p>"My Style and Choice"</p> 	<p>"Balance & Purposeful"</p> 
<p>Customization! Huge portions!</p>	<p>Many small dishes. Nutritional balance!</p>

○グループB

(1) メンバー

ランジャンイシャン (リーダー)、平川菜央、山本雪乃

(2) テーマ

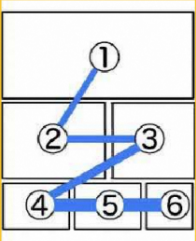
日本のアニメ・マンガ文化について

(3) 内容

- 日本は多くアニメーションがある。
- 日本のマンガの例
日本のマンガは多くの人に読まれている。具体例を紹介。
- 一番多く発行されているマンガについて
ゴルゴ 13 は 218 巻発行されており、ギネス世界記録に登録されている。
- 日本のマンガとアメリカのコミックの違いについて
日本のマンガは、縦書きで右から左に読み、白黒。
アメリカのコミックは、横書きで左から右に読み、カラー。
- どこでマンガを見つけることができるのか
本屋さんでたくさんのマンガが売っている。また、学校の図書館でも借りることができる。
- アニメについて
主に、マンガをもとに作られる。具体例を紹介。
- サウンドトラックについて
記憶に残るユニークな音楽のため、多くのファンが楽しんでいる。
具体例を紹介。
- アニソンの紹介
具体例を紹介。

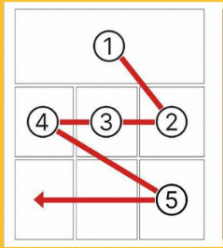
Differences Between Japanese Manga and American Comics

◆-----◆



A.

Which one looks more like an American comic?
Japanese and American comics have different reading directions, so keep that in mind when you think about it!



B.

○グループC

(1) メンバー

樋口理帆（リーダー）、静谷匡、原彩華

(2) テーマ

日本の部活動について

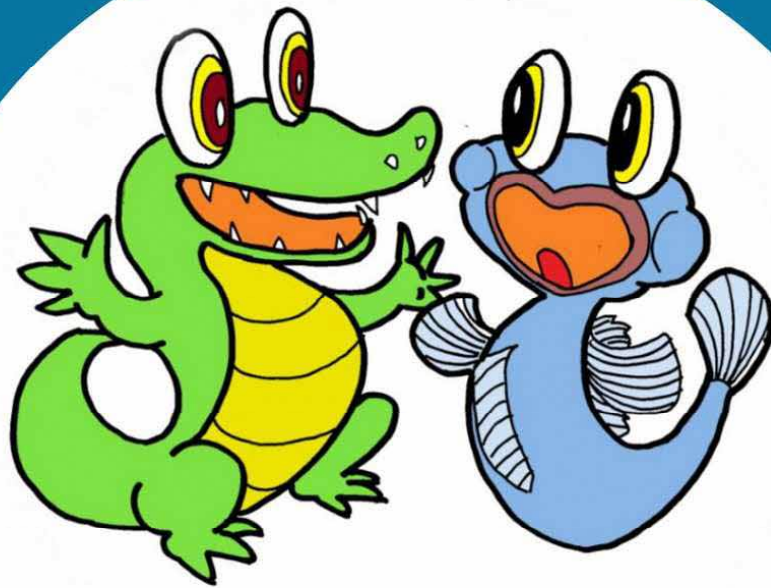
(3) 内容

- 日本とアメリカの部活動の大きな違い
日本の部活動ではチームワークが一番重要とされている。
- 軽音楽部の活動について（樋口）
軽音楽部は日本では人気の部活動である。同じ系統の仲間でバンドを組み、歌詞を考え、曲を作成する。放課後は、ほぼ毎日音楽室へ行き、練習をする。また、自分たちで音楽イベントを企画・開催したり、大会に出場することもある。大会に出場した様子を動画で紹介。
- 私はどの部活に所属しているのでしょうか？（クイズ）
答えは、「バスケットボール部」。
- バスケットボール部の活動について（静谷）
20人のメンバーで構成されており、毎週水曜日～日曜日、主にシュートとディフェンスドリルの練習している。練習ではチームワークが重視されている。「スラムダンク」の「あきらめたらそこで試合終了ですよ」というフレーズを心に、いつも練習をしている。
- 水泳部のマネージャーとしての活動について（原）
部員は、スピードと技術力を磨くため、一生懸命練習している。また、文化祭でシンクロナイズドスイミングのパフォーマンスを発表するため、チームとして練習をしている。
マネージャーは、タイムを図ったり、パフォーマンスの様子を動画に撮るなどしている。毎日チームの成長を見れることは、とても嬉しい。
- 日本のユニークな部活動について3つ紹介
 - ① 鉄道研究部
 - ② クイズ研究部
 - ③ 競技かるた部



14.浦安市青少年海外派遣事業のあゆみ

回	年度	派遣期間	派遣人数
1	平成2年度	12/23～1/3	15
2	平成3年度	7/29～8/9	20
3	平成4年度	7/22～8/2	10
4	平成5年度	7/23～8/3	12
5	平成6年度	7/22～8/2	12
6	平成7年度	7/21～8/1	15
7	平成8年度	7/26～8/6	12
8	平成9年度	7/20～7/31	12
9	平成10年度	7/21～8/1	12
10	平成11年度	7/21～8/1	12
11	平成12年度	7/29～8/9	12
12	平成13年度	8/18～8/29	12
13	平成14年度	8/17～8/28	12
	平成15年度	サースの影響により、安全重視のため中止	
14	平成16年度	8/14～8/25	14
15	平成17年度	8/13～8/24	14
16	平成18年度	3/21～3/30	14
17	平成19年度	3/21～3/30	14
18	平成20年度	3/20～3/29	15
19	平成21年度	3/19～3/28	15
	平成22年度	震災の影響により、延期	
20	平成23年度	3/16～3/23	13
21	平成26年度	3/14～3/21	10
22	平成27年度	3/12～3/19	10
23	平成28年度	3/11～3/20	10
24	平成29年度	3/7～3/16	10
25	平成30年度	3/6～3/15	10
	令和元年度	新型コロナウイルス感染症の影響により、中止	
26	令和7年度	3/1～3/10	10
合 計			327



アリー & ゴビー

浦安市・オーランド市姉妹都市キャラクター

企画・編集：浦安市 市民経済部 地域振興課
〒279-8501 千葉県浦安市猫実1-1-1
発行：令和8年4月